
甲子園の切符

工藤 円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甲子園の切符

【Nコード】

N7997F

【作者名】

工藤 円

【あらすじ】

一度は夢を捨てた少年藤村裕也と、“甲子園のヒーロー”と結婚する夢を持つ小林若菜。甲子園を夢見る二人と、それに纏わる人々の物語。

第1話『結婚相手は甲子園のヒーロー』

『ゆうや君、こーしえんって知ってる？』

くりくりとした目の少女は聞いた。

『こーしえん？ 何それ』

『なんかね、やきゅー人の聖地なんだって。お兄ちゃんが言ってた』
『ふーん』

少年は興味なさ気に相槌を打った。

『ねえ、連れてってよ。こーしえん』

少女は少年の腕を引く。

『なっ、なんだよ。お母さんに連れてってもらえよ』

『うん。でもね、キップ売ってないんだってさ』

『えっ、電車で行けないの？』

『お兄ちゃんが言ってた』

『えーっ、なにそれ。電車で行けないところなんてあるの？』

『ないはずだけど……。お兄ちゃんがそう言ってたもん』

『うーん……。きつと、こーしえんって作り話なんだよ』

『裕也！ 早く行くぞー』

六月。神奈川の朝は既に蒸し暑く、この日も太陽が地面を照りつけていた。

『早くしろよ。遅れちゃうだろ！』

小林若菜、十六歳。健康的な小麦色の肌はソフトボールの賜物だ。『うるせーなー。高校生になったんだから学校ぐらい一人で行けよ』そう言つて、藤村裕也はそのそと階段を降りてくる。裕也と若菜の家は隣り合わせで、高校へ入学した今も毎朝の登校を共にしている。

『あら。こんな美女と登校できて嬉しくないの？』

若菜は右腕を裕也の首へと回した。

「バカ！　　ったくよー……。一緒に学校なんか行つて、クラスで変な噂立つたらどーすんだ」

裕也は若菜の右腕を払い、ブツブツと呟く。

「ん、何か言つた？」

「何でもねーよ！　早く行くぞ」

裕也と若菜は、この春から旭ヶ丘高校へと通い始めた新入生です。若菜は兄が通っているから、裕也は家から近いから、とそれぞれの理由で、何だかんだと腐れ縁は続きます。

「裕也、早く野球部入らないのかよ」

登校中、若菜は裕也の顔を覗き込んでそう尋ねた。

「うん」

裕也は即答した。

「えーっ。甲子園に連れてってくれるって約束したじゃんか」

「してねーし。兄ちゃんに連れてってもらえば良いだろ」

裕也は無愛想にそう言い放つ。

「まあね！　お兄ちゃん、今年こそは甲子園行けるかもって言うってたし、期待大！」

若菜は無邪気に表情を明るくした。

「だろ。それで良いじゃん」

「保険よ、保険！」

「お前な……」

裕也は呆れ、こつんと若菜の額を小突いた。

「もう。甲子園行かねーと結婚してやらないぞ」

若菜の結婚相手の条件は、『甲子園出場経験アリ』なこと。若菜が『こーしえん』の本当の意味を理解して以来、それが理想の男性像となっていた。

「ケッコーでござんす。兄ちゃんと結婚してろ」

裕也は興味薄げな目で舌を出してみせた。

キーン！ 朝のグラウンドに、心地よいバットの男が響き渡る。

「お、やってるやってる」

若菜は親指と人差し指で輪を作り、その中から覗き込む様に右目を凝らした。

「気合い入ってんね」

「そりゃね。お兄ちゃん達はもう最後の大会だし。気合い充分よ」
若菜は誇らしげに笑う。

「……甲子園、行けると良いね」

「ふふん、その時になって後悔しても遅いのよ？」

若菜は結婚の事を言っていた。それはいつもの他愛無い冗談の一種だったが、裕也の目は微かに沈んだ。

「えっ……、け、結婚！？」

中学生時代、野球部のバッグを肩に掛けて歩く裕也が若菜の言葉に目を丸くする。

「そ。私、絶対甲子園に出た事のある人と結婚するの！」

「……な、なんで？」

裕也は驚いた様に尋ねた。

「だって、カッコイイじゃない。努力して努力して努力して、その末に自分の夢を掴むなんて！　　そういう人と、結婚したいの」

若菜は目を輝かせて語る。

「そ、そう……」

「だから、アンタも頑張んなさいよ！」

若菜は力強く裕也の肩を叩く。

（が……、頑張ろう）

絶対に若菜に気付かれる訳にはいかなかったが、この時の裕也は確かに、希望に胸を燃やしていたはずだった。

第2話『遊ぶとき用』

ガラッ。教室の扉が開く。

「あのー、すいません。このクラスに藤村くんっていますか？」

教室に入ってきたのは一人の女子生徒だった。裕也は、机に伏せたままの顔を上げようとしない。

「おい藤村、呼んでんぞ」

傍の男に肩を叩かれ、裕也は仕方なく体を起こした。

「あつ、ふ、藤村くん？」

「そうだけど。あんた誰」

裕也は無愛想に返事を返す。

「あつ、ごめん。私野球部のマネージャーやってるの」

野球部一年生マネージャー、川内香織。

「ふーん」

裕也は興味無さげに頷く。その態度に香織は少し申し訳無さそうな顔をして、慌てて口を開いた。

「あのさ、藤村くんって中学の時小林先輩とシニア（中学生を対象とした野球リーグ）で一緒だったよね！？」

「ああ……、うん」

「小林さんが怒ってたよ。何で野球部に入らないんだって。それで今日の放課後野球部に顔出せって伝える様に言われたの」

裕也は明らかに嫌そうな顔をして、少し無言で間を挟む。

「無理にとは言わないけど、是非一度見に来てみてね！ 練習は授業終わったらすぐ始まってるからさ」

その言葉の尻に重なる様に、予鈴が鳴り響いた。香織は手を振って慌てて教室を出る。

「あー。行けたら行くわ」

裕也は再び顔を机に伏せ、右手をヒラヒラと振り返した。

放課後、帰り支度を済ませた裕也は校門を出る前に一応グラウンドに立ち寄ってみた。既にグラウンドには打球音や部員の掛け声が響き渡っている。

「あ、藤村くん！ 来てくれたの！？」

野球部のグラウンドに近づくと、香織はすぐに裕也の存在に気がついた。

「ああ、まあ一応ね。小林さんは？」

裕也は辺りを見回す。

「それが、今日ちよつと遅れるらしいんだ。クラスの用事があるらしくて」

「ええっ、なんだよ。じゃあもう帰って良いの？」

「えっ、ううん……」

香織は困った様に口を紡いだ。

「おっ、そいつが例の一年か？」

その時、突然二人の後ろから声がした。

「？」

裕也が振り返ると、そこにはバットを持った野球部員が立っていた。

「小林から聞いてるぞ。良いピッチャーが一年にいらっ」

野球部二年、林本はそう言って陽気に笑う。

（誰だよこいつ）

裕也は少し不機嫌そうに目を逸らした。それを見て、林本は地面のボールを拾い上げる。

「ちよつと打ってみたいなあ、お前の球。投げてみてくれよ」

「！」

「ちよつと林本さん、そんな勝手に……」

「まあまあ。別に良いじゃん、少しぐらい」

林本は笑顔で香織をなだめる。

「な、お前も良いだろ？」

言いながら、林本は左手にはめていたグローブを外し、それを裕也に手渡した。

「……………」

林本を囲う四角い白線、バッターボックス。その横にはホームベースがあり、そこから18.44m先、盛り上がったマウンドの上に裕也は立っていた。

林本はバットを構え、笑みを浮かべている。

裕也の左手には林本のグローブがはめてあり、裕也は二、三回、ボールを出し入れた。

「さ、こい」

「……………」

大きく振り上がる両腕。そこから三拍置き、振り上げた両腕を下げるのと同時に足が上がる。

（藤村くんの球……）

香織は真剣な目つきで一連の動作を眺めていた。

左手にはめたグローブがバッターの方を向き、そして、裕也は右腕を振り切った。

キン！

白球が、外野に設置された簡易フェンスを軽々と飛び越えた。心地良い打球音は暫く響き、一瞬静まり返った空気が流れる。

「……………」

裕也は、その打球の行方を眺めていた。

「おいおい、何だよその球」

林本はバットの先を裕也に向ける。

（100km/h、110km/h……。いや、そんなに出てない

な。90km/h超くらい？)

香織は意外だという様な顔で裕也を見ていた。

(90km/hか……。肩慣らししてないのと、帰宅部で暫く投げでないだろうから本当はもうちょっと速いんだろうけど、やっぱり110km/hちょっと。高校一年生としては普通？)

「手抜いたのか？」

林本が裕也に尋ねる。

「いえ。全力出させて頂きましたけど」
裕也は飄々と答えた。

「……………」、そうか。悪かったな、わざわざ投げさせて」
そう言つと、林本はバットをその場に投げ捨てバックネット裏へと歩いていった。

「……………」

「藤村くん、野球部に入るつもりはないの？」

「無いけど」

即答。香織の顔が一瞬凍る。

林本との一球勝負を終えた後、裕也と香織はグラウンドの隅の方で喋っていた。

「あつ、あはは。そつか、ごめん」

香織は凍った空気を笑い飛ばし、右手で頭をさすった。

「うーん、残念だなあ」

「？」

「小林さんがね、言ってたの。『藤村は良いピッチャーだー』って」
「……………」。何言つてんだよ。見ただろ、さっきの」

「うっん、小林さんが言うんだもの。きつと、藤村くんは凄い素質

を秘めてるのよ！」

裕也は軽く笑った。

「……………。ウチは人数も少ないし野球ではまだまだ無名校だけど、皆本当に頑張ってる」

香織は、グラウンドで練習している部員達に目を向ける。

「そして今年は小林さんの代が三年生だし、もしかしたら　　って
思うんだ」

香織は少し照れくさそうに笑う。

「もしかしたら、って……………」

裕也は、聞いてみた。

「　　うん。…………本気で目指してるよ、甲子園」

心地の良い、風が吹く。

「　　そっか。頑張れ、応援してる」

そう言って裕也は振り返り、香織とは反対方向へ歩き出した。

「……………」

その後姿を、香織は不思議そうな顔で暫く眺めていた。

「よお香織。悪いな、遅れた」

小林が、後ろから香織の頭に手を置く。

「あつ、小林さん！　もう、藤村くん来てたんですよ！」

「えっ、マジ！？　もう帰った！？」

小林はキョロキョロと辺りを見回す。

「はい。さっき帰っちゃいましたよ」

「うわゝっ、引き止めといってくれよ」

「そんな事言われても。それに……………」

香織は、何か言いたげな顔で小林の顔を見る。

「ん、どうした？」

「あ、あの……正直、そこまで良いピッチャーでは無いと思うんですけど」

「？」

「スピードもそこまで無かったですし、林本さんにホームラン打れてましたし」

香織は何か申し訳なさそうに話す。それを聞いた小林は意外そうな顔をした。

「え、本当か？ おかしいな、藤村って言えばシニアでも大分良いセンいってたサウスポーなんだが」

「え！？ サウスポー 左投げ！？」

『おい若菜！』

幼き頃の裕也。

『どうしたの？』

『俺、左手でも右手でも投げられるようになるぞ！』

右投げ用と左投げ用のグローブを、それぞれ手にはめ若菜に見せびらかす。

『何それ』

『左手でも右手でも投げられるピッチャーになる！』

『？ どうせ、結局試合では左手で投げるんでしょ？』

『そ、それはそうだけど……。一応、遊びで野球やる時とか用に』

『じゃあ意味ないじゃん』

『お前わかってないな。たとえ遊びでも、両刀投げってなんか力ツコイイだろうが』

『そうなの？』

『そうだよ。誰もが憧れる最強のピッチャーだぞ』

『ほんと？ ならリョウトウ投げになつて！』

若菜は目を輝かせる。

『おっしや、じゃあ練習しよーぜ』

『うん!』

そして、二人は近くの公園へと駆け出していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7997f/>

甲子園の切符

2010年10月9日07時47分発行